



Title	大阪大学総合図書館の入館者数等の推移：現状の分析からサービス環境向上のヒントを考える
Author(s)	久保山, 健
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/14194
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学総合図書館の入館者数等の推移
—現状の分析からサービス環境向上のヒントを考える—
大阪大学 附属図書館 利用支援課
久保山 健

1. はじめに

大阪大学総合図書館では、耐震改修工事に伴う 2009 年 6 月のラーニング・コモンズのオープン後、入館者数や貸出冊数が増加したが、本稿では、身分別の内訳などを見ることによって、それらの数字から示唆されることを考察する。

要点は以下の通りである。

- ・入館者数の内、学部生は急増したが、大学院生・教職員は逆に減少している。
- ・学部生の増加は、大学統合効果を超えている。
- ・学部生の貸出冊数は増加したのは事実だが、入館者数の増加よりは低い。
- ・総合図書館の場所としての性格が変化しつつあるのではないか。
- ・そこから浮かんできた課題の例示

2. 近年のイベントの振り返り

入館者数や貸出冊数の分析の前に、それらに影響を与えたであろう大きなイベントを確認しておく。

- ・2007 年度（10 月）大阪大学と大阪外国語大学の統合
- ・2008 年度 貸出数の上限を拡大（8→16 冊）
総合図書館（当時は本館。以下、現在の名称で記載する）で耐震改修工事
- ・2009 年度（5 月）総合図書館の開館時間延長（授業期）
平日：21 時→22 時 土日：17 時→19 時 祝日：新規（10-17 時）
(6 月) 総合図書館ラーニング・コモンズ オープン
端末ゾーン、サイレントゾーンもオープン
- ・2010 年度（12 月）総合図書館で早朝開館の試行（8:40 開館、授業期間）*)2 月まで
- ・2011 年度（4 月）総合図書館で早朝開館の実施（8:00 開館、授業期間）

3. 入館者数

（1）結果

2003 年度から 2010 年度の推移を図 1 に示す(*1)。

2010 年度の対 2007 年度比は、以下の通りである。学部生が大きく伸びて、逆に大学院生と教職員では微減していることが分かる。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ・入館者全体 = 1.45 | ・ <u>大学院生</u> = 0.95 |
| ・学内者 = 1.44 | ・教職員 = 0.97 |
| ・ <u>学部生</u> = 1.61 | ・学外者 = 1.78 |

（2）評価

学部生については、統合前の大阪外国語大学を母体とする外国語学部の学生数を考慮しても、3 年間で 1.61 倍の伸びは大学統合効果を超えていると判断できる。また、”学

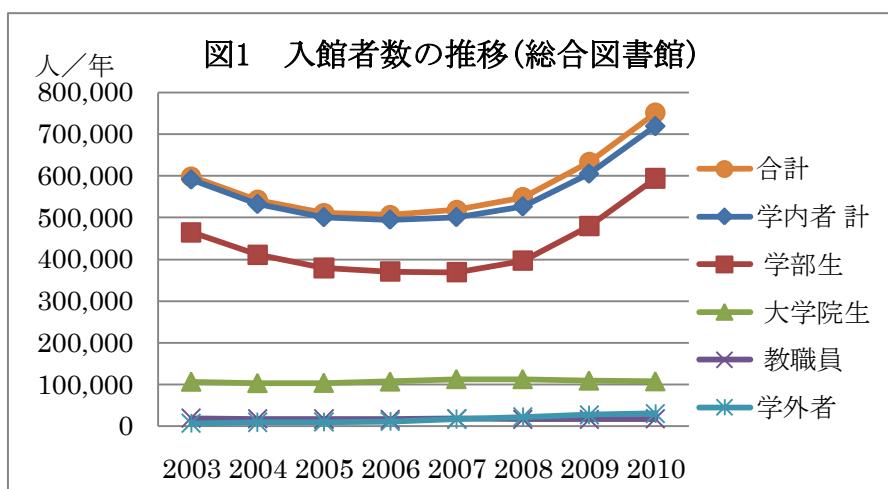
内入館者数／開館総時間数”の値も、2010年度は対2007年度比で1.30となっており、開館時間数の増加も超えて、入館者数が増えたことが分かる。

この増加の要因として、ラーニング・コモンズが大きいことは間違いないだろうが、同エリアの座席数は全体の1割にも満たない。そうすると、端末ゾーンも含めた全体的な整備による機能の充実、従来からの利用者のための静かな学習環境(サイレントゾーン)の確保、いくつもの学習環境整備の取り組みや、関連部署との連携、そして、開かれた図書館というイメージ発信により、学部生を誘引することになったことなども要因として考えられる。

しかし、単なる新築効果も含まれるかもしれないことは、念頭に置いておくべきかもしれない。

一方、大学院生・教職員については、微減である。これは、電子リソースの利用に伴う非来館型の利用にシフトしたことが大きいと推測できるが、サイレントゾーンの設置にも関わらず、自習型のユーザをカバーできていない懸念も感じる。

また、学部生の増加率の大きさから、実入館者数も増えたと考えられるが、その比率などは不明である。



4. 貸出冊数

(1) 結果

2003年度から2010年度の推移を図2に示す。

2010年度の対2007年度比は、以下の通りである。学部生、大学院生が伸びていることが分かる。

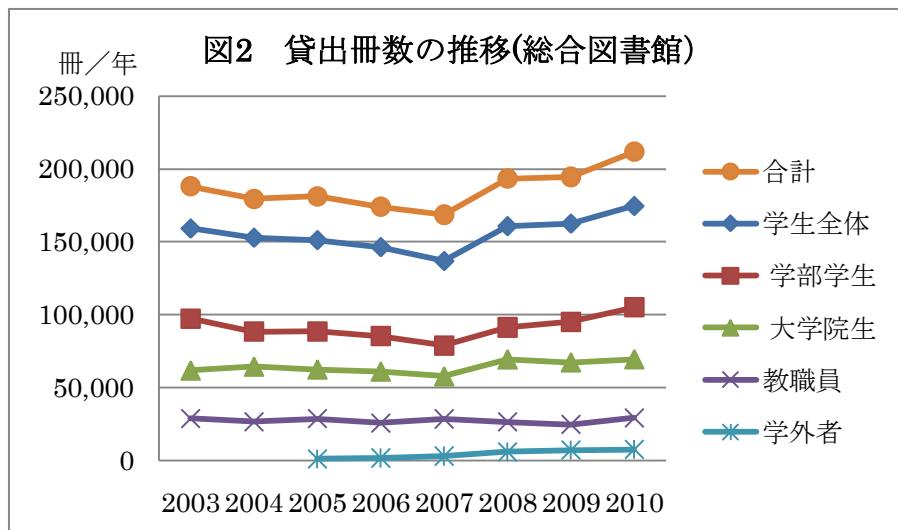
- | | |
|-------------|------------|
| ・全体=1.26 | ・大学院生=1.20 |
| ・学生=1.28 | ・教職員=1.02 |
| ・うち学部生=1.33 | ・学外者=2.46 |

(2) 評価

学部生については、大きく伸びたのは間違いないが、人が集まつほど本を借りる学

生が増えたわけではないとも言える。“貸出冊数／入館者数”2010年度の対2007年度比は0.83である。入館者数の増加に、資料整備が追いついていない面があるのかもしれない。よく似た傾向を示した東京女子大学の図書館では、本学総合図書館と規模は異なるが、館内で資料を利用する傾向が出ているとの見方もあるようである(*2)。

大学院生での増加については、貸出冊数の上限を増やした2008年に急増し、その後は横ばいであることから、上限冊数の変更が大きな要因であろう。



5. 入館者数と貸出冊数の推移から見えてきたもの

学部生の利用の伸びや、入館者数に対する貸出冊数から、場所としての総合図書館は、”学部生向け学習用図書館の性格”が強くなりつつあることや、”場所としての利用”が相対的に増えたことが推測できる。

学士力向上の文脈ではプラスの材料と解釈することもできるし、そこから新たな課題を検討することもできるだろう。

“場所”に関連して、座席数の変化を見てみる。座席数の2010年度の対2007年度比は1.04である。ユーザの滞在時間数や、最大の滞在者数が不明であるため、不足度合いも不明であるが、留意しておく点の一つであろう。

また、学外者の数値が率としては最大の伸びを示している。これが、人員や場所の資源配分・各コーナーの運用・広報内容など、今後のサービス設計に影響を及ぼすことも想像できる。課題として念頭に置いておきたい。

6. 今後の課題：結びに代えて

以上、本稿では、入館者数と貸出冊数の推移から、総合図書館の現況の一端を検討した。最後に、結びに代えて、そこから浮かんできた課題を整理する。

- (1) 議論できる座席の増加：日々の観察から、ラーニング・コモンズでの座席の少なさは明らかである。一方、全館的な状況を把握するため、混雑する時間帯に空席率を調査する必要もあるだろう。

- (2) 学習支援の取り組み： 2010年12月の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」^(*)3) でも求められていることである。入館者数等だけから導くのは短絡的だが、総合図書館が学生にとって”コモン”な場所としての性格を強めているならば、学習支援に取り組むための一つの下地はできたと考えられる。現状としては、ライティング指導や各種コーナーの運用が課題であろう。
- (3) アメニティ、学習しやすい空間作り： 総合図書館で過ごす学生の数が増えたことは、過ごしやすく、学習しやすい空間作りを再確認する契機になるのではないだろうか。併せて、図書館の考えるルールと、学生の行動の差を考慮し、インタラクティブに快適な空間を作る取り組みは、今後も重要だろう。
- (4) 空間デザイン力： 最後は少し広げすぎというのは自覚した上であるが、多数の多様な学生のニーズに応えるために、図書館スタッフにとって、今後も、エリア分け、家具、内装等々、空間デザイン力とでもいうことがより必要になるのではないだろうか。

¹ 入館者数、貸出冊数とともに、大阪大学附属図書館の「年次報告・自己点検評価報告書」を元に作成した。但し、2010年度は内部の確定版統計表を元にした。

² 山本由美. マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成长を支援する滞在型図書館プログラム（大学図書館問題研究会 第42回全国大会). 2011.8 での質疑応答にて。

³ 大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像（平成22年12月 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会）<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/singi201012.pdf> (accessed 2011.9.2)

本まとめの概要：http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/singi_gaiyo201012.pdf (accessed 2011.9.2)

(2011.9.2)